



<b>Data</b>	2024-3
総監督・製作・主演: 甄子丹 (ドニー・イエン)	
監督: カム・カーワイ	
製作: 王晶 (ウォン・ジン)	
原作: 金庸著 長編武俠小説『天龍八部』	
アクション監督: 谷垣健治	
出演: 甄子丹 (ドニー・イエン) / 陳鈺琪 (チェン・ユーチー) / 劉雅瑟 (リウ・ヤースー) / 吳樾 (ウー・ユエ) / 張兆輝 (チョン・シウファイ)	

## みどころ

1980年代に香港の若手スターだった、張國榮 (レスリー・チャン)、梁朝偉 (トニー・レオン)、劉德華 (アンディ・ラウ) や張曼玉 (マギー・チャン)、劉嘉玲 (カーリーナ・ラウ) たちは、いわば1960年代の日活の青春スターだった吉永小百合、浜田光夫、高橋英樹、和泉雅子らと同じで、若くて瑞々しく輝く存在だった。しかして、李小龍 (ブルース・リー) もレスリー・チャンも亡き今、60歳になった甄子丹 (ドニー・イエン) が同年代のスターたちのトップに君臨！それは『イップ・マン』シリーズのヒットや『ジョン・ウィック：コンセクエンス』(23年)でのキアヌ・リーブスとの共演等を見れば明らかな。

そんなドニー・イエンが総監督兼製作者として、金庸の原作『天龍八部』を映画化したうえ、全編にわたって主演！自らの肉体を使ったリアルアクションではなく、無重力アクションと“気”の表現による神怪武侠映画で大活躍！

本作は壮大な原作の一部だけだから、シリーズ化が大前提！本作の面白さはもちろんだが、エンドロール終了後の数カットの“予告編”を見れば、続編への期待も増幅するはずだ！

## ■□■甄子丹 (ドニー・イエン)、60歳にして絶好調！■□■

中国・広東省出身の甄子丹 (ドニー・イエン) は1963年生まれ。したがって、彼は、去る12月29日にデジタルリマスター版で再度観た、王家衛 (ウォン・カーワイ) 監督の第2作目で、世界的に大ヒットした『欲望の翼』(90年)に大集結していた、1980年代の香港を代表する若手スターである、張國榮 (レスリー・チャン)、張曼玉 (マギー・チャン)、劉嘉玲 (カーリーナ・ラウ)、梁朝偉 (トニー・レオン)、劉德華 (アンディ・ラウ) らと同年代だ。

他方、ドニー・イェンは張芸謀（チャン・イーモウ）監督の『HERO』（02 年）（『シネマ 5』134 頁）では、趙の国の刺客・無名（ウーミン）役を演じた李連杰（ジェット・リー）らとともに、槍の名手・長空（チャンコン）役を演じていた。また、『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・チャイナ 天地大乱』（92 年）や『イップ・マン』シリーズ（08・10・15・19 年）が大ヒット。近時はハリウッド映画『ジョン・ウィック：コンセクエンス』（23 年）（『シネマ 53』55 頁）にも出演するなど、絶好調だ。李小龍（ブルース・リー）は 1973 年 7 月 20 日に死亡し、レスリー・チャンも 2003 年 4 月 1 日に死亡。ジェット・リー、トニー・レオン、アンディ・ラウらはそれぞれの分野で活躍しているが、2024 年の今、ほぼ同年代の彼らの中では、ドニー・イェンが 60 歳にして頂点に立っていると言えるだろう。

また、あまり知られていないが、『ツインズ・エフェクト』（03 年）で多くの美男美女と共に出演した彼は、同作で共同監督兼アクション監督も担当し、第 40 回金馬獎、第 23 回香港電影金像獎で最優秀アクション設計賞を受賞している。そんな彼のホンモノのアクション俳優としての才能は、『イップ・マン』シリーズの大ヒットによって“宇宙最強”というキャッチコピーを生んだ。そのため彼は本作では、主演だけでなく、総監督、プロデューサーを兼ねるという神業を成し遂げるまでになっている。本作では、そんな 60 歳にして絶好調のドニー・イェンに注目！

## ■□■原題は？原作は金庸の長編武俠小説『天龍八部』！■□■

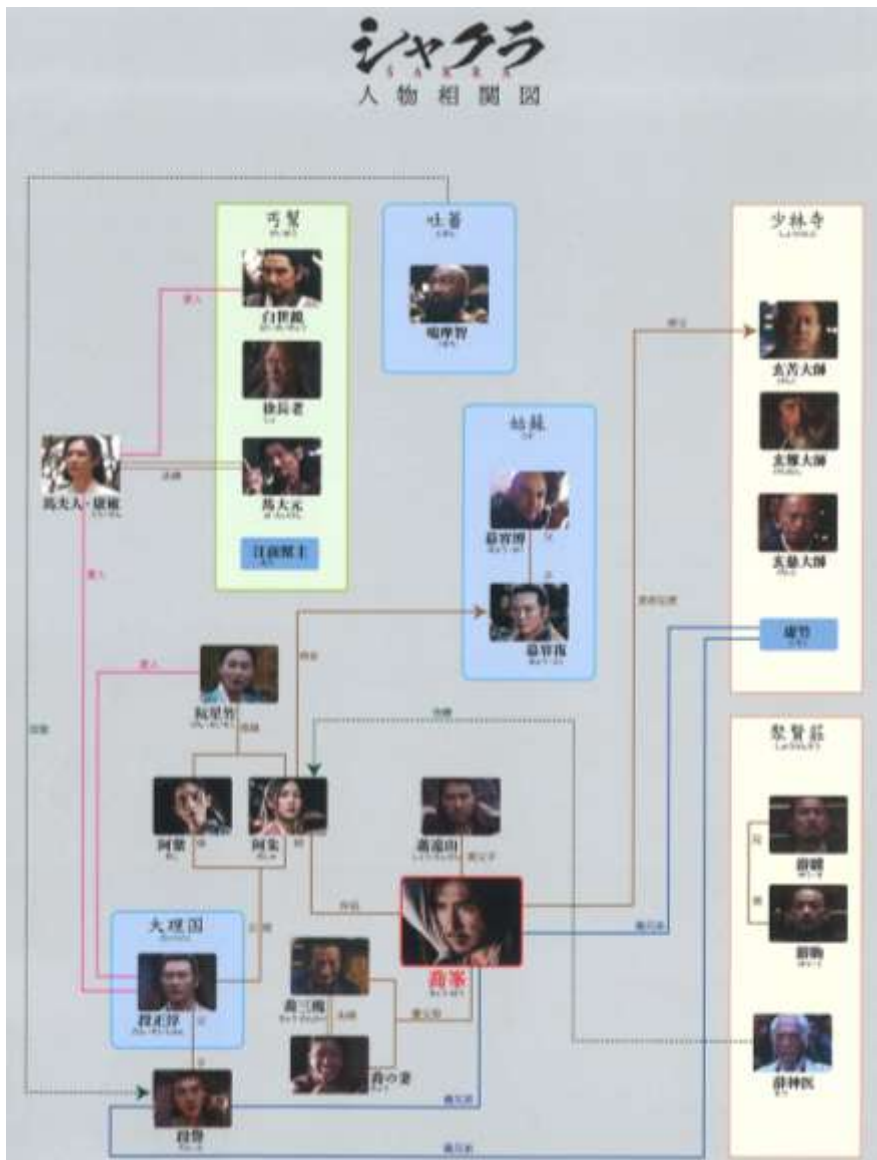
本作の邦題は『シャクラ』だが、これでは何のことかさっぱりわからない。しかし、本作の原題が『天龍八部之喬峰傳』だと聞き、また、本作の原作が中華圏を代表する小説家・金庸の武俠小説『天龍八部』だと聞くと、なるほど、なるほど。

『天龍八部』は段誉、喬峯、虚竹、慕容復の 4 人を主人公とした長編武俠小説だが、本作は原作の喬峯編ともいふべき部分を映画化したものだ。今ドキの日本人は司馬遼太郎の原作だと聞いても、何の物語かサッパリわからない輩が増えているから、中華圏を代表する金庸の小説『天龍八部』と聞いてもさっぱりわからないだろう。そんな人々のために、本作のバンフレットには、土屋文子氏（翻訳家・早稲田大学講師）の「半神半魔の歡喜と苦惱—小説『天龍八部』入門—」があるので、これはすべての日本人が熟読したい。

それによると、日本語環境で観られる過去の映像画作品としては、大陸製作のものが 2 つあるそうだが、本作ラストの予告編とも言うべき数カットを見ると、ドニー・イェン監督が本作をシリーズ化する目的で本作を完成、公開したことは明らかだ。『ジョン・ウィック』シリーズ第 4 作『ジョン・ウィック：コンセクエンス』でキアヌ・リーブスと共演したドニー・イェンは、シリーズ化の効用を痛感しているはずだが、金庸の長編武俠小説の全貌を知る中でシリーズ第 1 作となる本作の内容を観れば、今後のシリーズ化への期待も膨らむはずだ。香港映画では『インファナル・アフェア』（02 年）（『シネマ 5』333 頁）も第 1 作目からシリーズ化が予定されていたが、それに倣って本作も第 1 部の大ヒットはもちろん、シリーズ化の成功にも期待したい。

## ■□■登場人物は？人物相関図は？■□■

複雑極まりない本作の登場人物と人物相関図を、パンフレットから引用すれば次の通りだ。



## ■□■ストーリーは？時代背景は？シャクラとは？■□■

チラシに躍る本作の謳い文句は「武林最強の技『降龍十八掌』ですべてを倒す！！」というものだが、さて「降龍十八掌」とは？そのアクションをスクリーンに映し出すアクション監督は、日本で大人気の『るろうに剣心』（12 年）シリーズでアクション監督を務めた谷垣健治だから、『るる剣』ファンの日本人はとりわけ本作必見！本作のストーリーは複雑だが、あえて要約に要約を重ねたそれを、チラシから引用すれば次の通りだ。

宋代の中国。丐幫（かいほう）の幫主・喬峯（きょうほう／ドニー・イェン）は誰からも慕われる英雄的な存在だった。だがある日、何者かに副幫の馬が殺害され、その犯人に仕立て上げられてしまう。しかも自分が漢民族ではなく契丹人であるという出自まで明かされ丐幫を追放される。自らを陥れた人間を探し出し、さらに自身の出生の真実をつきとめるため喬峯は旅にでる。しかし、彼の行く手には更なる罠が仕掛けられていた！武林最強の技『降龍十八掌』を使い、襲い来る刺客たちをなぎ倒す喬峯。果たして彼は黒幕を突き止め復讐を果たすことが出来るのか！？

パワフルでスタイリッシュに、絶えず闘い続ける無敵の喬峯。剣術、打狗棒、そして拳という 3 要素の闘いを中心にした、ハイスピードかつ鍛錬された技が繰り広げられるバトルシーンの迫力は、観客を圧倒する！！

本作は武林最強の技『降龍十八掌』を駆使したアクションを謳い文句にした武侠映画だが、他方で悪女の馬夫人（王君馨／グレース・ウォン）が波乱のストーリーを牽引し、美女の阿朱（あしゅ）（陳鈺琪／チェン・ユーチー）が喬峯との純愛ストーリーを牽引していくので、この 2 人の美女にも注目！ちなみに、シャクラとは、前記土屋氏のコラムによれば、「軍神・帝釈天を筆頭とする「天」に対応するのは喬峯だというのが通説で、映画のタイトル『シャクラ』（帝釈天のサンスクリット名）もここに由来するのでであろう」とされている。

## ■□■リアル・アクション vs ハイブリット・アクション！■□■

『イップ・マン』は、ブルース・リーが唯一の師と仰いだ実在の人物イップ・マンの生涯を興味深く描いた映画だった。西欧列強占領下の香港でイップ・マンが詠春拳の道場を開き、ホン師匠らと協力していく中、イギリス人のボクサーにホン師匠が蹂躪され、リング上で息絶えてしまう中、最後に見事、中国伝統の技を花開かせていった映画『イップ・マン 葉問（葉問 2）』（10 年）（『シネマ 34』479 頁）は感動的だった。また、同シリーズではワイヤーアクションに頼らず、あくまで人間の肉体で見せるリアル・アクションが売りだった。それに対して、谷垣健治をアクション監督に迎えた本作で見せる、喬峯の武林最強の技である『降龍十八掌』の全貌は？それを表現するのがアクション監督の役目だし、それをスクリーン上で演じるのがドニー・イェンの役目だから、それはあなた自身の目でしっかりと。

パンフレットにある江戸木純氏（映画評論家）の「リアル・アクションとデジタルのハ

イブリットが生む神怪武侠映画の最新進化形」によると、「“神怪武侠映画”の最大の視覚的特徴は、登場人物たちが自由に空中を飛翔する“無重力”と格闘シーンにおける直接的な接触を伴わない“氣”の表現にある。」と分析されているので、本作のアクションではそれに注目！もっとも、『イップ・マン』シリーズで見たドニー・イェンの肉体をフルに使ったリアル・アクションと、本作に見る、デジタルのハイブリットによるアクションを対比して、そのどちらが好きかはそれぞれの人の感覚によるものだ。私はやっぱり『イップ・マン』派だが、さて、あなたは・・・？

## ■□■北宋の時代とは？vs 夏・殷（商）・周の時代■□■

あなたは、秦の嬴政（えいせい）（後の始皇帝）が、周辺の六国（韓、魏、趙、楚、斉、燕）を滅ぼし、中華統一を成し遂げた、春秋戦国時代末期の歴史を知ってる？また、それ以前の、夏・殷（商）・周の時代の中国史と“神怪小説”『封神演義』を知ってる？これは、『封神～嵐のキングダム～』（23年）の評論の“みどころ”として私が書いた文章だが、それを知っている日本人は少ないだろう。また、春秋戦国時代（紀元前 770～紀元前 221年）より以前の、「古代中国の時代」＝「古代王朝、殷と周の時代」を知っている日本人も少ないだろう。さらに、中国では『西遊記』『三国志演義』『水滸伝』『金瓶梅』という“四大奇書”が有名だが、それに次ぐ、『封神演義』を知っている日本人も少ないだろう。「2023 大阪・中国映画週間」の開幕式で上映されたのが、そんな『封神演義』を元にした映画『封神～嵐のキングダム』だったが、そのスケールの大きさと音響効果、そしてファンタジー色あふれる物語はメチャ面白かった。

他方、本作も日本人には馴染みの薄い、中国史のうちの、北宋の時代（1094年）の物語だ。前述した土屋氏の「半神半魔の歓喜と苦悩—小説『天龍八部』入門—」によると、本作の時代背景と主人公たちについては、次の通り書かれている。すなわち、

物語は北宋の哲宗元祐紹聖年間（1094年頃）、宋と遼（契丹）の対立を軸として、南方の大理、西の吐蕃と西夏、北の新興勢力である女真など周辺諸国が拮抗する中、親世代の因果に翻弄される4人の若者の過酷な運命を描く。

## ■□■幫主とは？喬峯はなぜ少林寺で修業を？彼の出自は？■□■

本作冒頭に見る、ドニー・イェン扮する喬峯は誰からも慕われる丐幫の幫主だが、“丐幫”って一体ナニ？幫主って一体ナニ？また、少年になった喬峯の武芸者としての師匠は少林寺の玄苦大師（ツァオ・シーピン）だが、なぜ彼は少林寺で修行を重ねたの？さらに、喬峯の出自が漢民族ではなく契丹人だと言われ、丐幫を追放されるに至ったのは一体なぜ？

そんな冒頭のストーリーを見るだけでも、金庸原作の武侠小説『天龍八部』を映画化した本作への期待が高まってくる。もちろん、日本人には宋と契丹、西夏、吐蕃との国際関係はわかりづらいから、喬峯が自らの出自に悩むストーリーもわかりづらい。ましてや、喬峯が自らの出自を調査するべく、置き去りにされた赤子を我が子のように育ててくれた養父母の元を訪ねると、既に彼らは殺害されていたうえ、喬峯が養父母殺しの犯人とされ

てしまったから、アレレ、アレレ。さらに、喬峯が自らの出自を確認するべく少林寺へ向かい、師匠の玄苦大師に出会うものの、なんと玄苦大師も喬峯の目の前で絶命し、喬峯はここでも殺人犯の濡れ衣を着せられてしまったから、さらにアレレ、アレレ・・・。

金庸の原作小説をいかに要領よくまとめようとも、歴史背景が複雑極まりない原作の「喬峯編」とも言うべき本作を理解するためには、かなりの集中力が必要だ。もともと、ドニー・イェン演じる喬峯が出ずばりの本作は面白さが続くので、スクリーンを凝視していれば、そのストーリー展開は十分理解できる。しかも、逃亡しつつ真犯人探しをする喬峯の前には、少林寺の秘伝書・易筋経を入手した美女・阿朱が登場し、どこか境遇の似た二人はどんどんその絆を深めていくので、その“恋愛模様”の展開にも注目！

## ■□■シリーズ化が大前提！ラストの数カットを見逃すな！■□■

本作前半は、丐幫の幫主としてみんなに慕われていた喬峯がその“出自”のために排斥されたうえ、養父母殺しと恩師殺しの汚名を着せられて、各派閥が集結した聚賢荘から殺害を命じられるまでに転落してしまう物語がスリリングに描かれる。しかし、「捨てる神あれば拾う神あり」のことわざどおり、窮地に陥ったうえ、瀕死の重傷まで負ってしまった喬峯を救助する人物が次々と登場してくるので、それに注目！その結果、本作後半の舞台は大理国に移り、大理国の鎮南王・段正淳（張兆輝／チョン・シウファイ）やその愛人・阮星竹（カラ・ワイ）、さらに阿朱の妹・阿紫（劉雅瑟／リウ・ヤースー）等が登場し、阿朱の出自の秘密を含めてさまざまなストーリーが展開していくので、それはあなた自身の目でしっかりと。

なお、本編が終了し、エンドロールが流れ終えた後に、一瞬続編の予告編と分かる映像が登場することがよくあるが、本作もまさにそれ。しかも、普通それはワンカットだけだが、本作のそれは数カット続くので、それを決して見逃すことなかれ。

本作は金庸の原作『天龍八部』のうちの喬峯編を映画化したものだが、『シャクラ』シリーズの続編は、誰を主人公とし、原作のどの部分を映像にするのだろうか？『ロッキー』（76年）や『ジョン・ウィック』（14年）（『シネマ 37』77頁）は当初からシリーズ化を前提としたものではなかったと思われるが、主人公のキャラが際立って面白かったため、次々と続編が作られてシリーズ化に成功した。それに対して、『スターウォーズ』や『指輪物語』は当初からシリーズ化を前提としたものだった。それと同じように、本作が当初からシリーズ化を前提としたものであることは、エンドロール終了後の数カットを見れば明らかだ。もちろん、そのためには本作が香港はもとより、中国本土でも大ヒットすることが不可欠だから、私はそれを期待したい。

2023（令和5）年1月17日記